

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：32639  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2013～2015  
課題番号：25381044  
研究課題名(和文) イエナ・プランにおける異年齢集団の構成法に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Multi-age Grouping in Jenaplan Schools

研究代表者  
佐久間 裕之 (SAKUMA, Hiroyuki)  
玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：70235208  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イエナ・プランにおける異年齢集団の構成法の思想と現状について調査し、異年齢集団の各構成法の特徴を解明することを目的としている。本研究を通じて、現代ドイツのイエナ・プラン校における2学年混合、3学年混合、4学年混合それぞれの構成法が有している教育学的意義と課題を示すと共に、異年齢集団に共通して求められている「共同体」としての内的性質の重要性を指摘した。本研究の成果を報告書にまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify educational thoughts and characteristics of three types of multi-age grouping (two-, three-, and four-grade levels) in Jenaplan schools based on field surveys in Germany. In consequence, the present study demonstrates the importance of multi-age grouping as a community. This study's report was disclosed to the public in March 2016.

研究分野：教育学

キーワード：イエナ・プラン 異年齢集団 ペーターゼン 共同体

## 1. 研究開始当初の背景

年齢別・学年別の学級編成を廃止し、学級そのものを異年齢集団によって編成することを、ドイツでは「異学年混合」ないし「異年齢混合」と呼び、学習形態に着目した場合には「異学年交流学习」といった表現が用いられ、異年齢集団による学習や交流への取り組みが行われている。こうした取り組みの背景には、現実社会がそもそも異年齢集団であることを前提として、そこへと接続する学校生活の形態も、同年齢集団による同質性の教室空間から異年齢集団による異質性の教室空間へと転換することが現実的であると見る見方が存在している。

このような異年齢集団への関心は、現行の学習指導要領が示しているように、我が国においても確認できる。しかし、同年齢集団を原則とした従来の教室空間を、このように異年齢集団によるものへと転換することは簡単ではない。単に異年齢の子どもを一緒にすれば済む問題ではない。また、従来の教室空間は、教師による一斉授業を前提としているが、異年齢集団による教室空間では、「子どもの個性的な成長の連続的過程を重視する学習指導」である「オープン授業」への転換も求められる。これらの課題解決は容易ではなく、ドイツでは異年齢集団による教室空間をめぐる賛否両論の議論が行われている。

教育史上、異年齢集団による学習や交流を積極的に推し進めた代表的な学校改革案の一つと見なされているのが、ドイツの「イエナ・プラン」(Jena-Plan)である。その創始者ペーターゼン (Peter Petersen, 1884-1952) は、1924年4月からイエナ大学附属学校で従来の学級を解体し、「異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせること」による内的学校改革に取り組んだ。これがその後イエナ・プランとして世に知られ、ドイツはもとより、隣国オランダを中心として展開していくことになったのである。

現代の学校教育における異年齢集団をめぐる課題解決への手がかりを導き出すため、研究代表者はこれまで異年齢集団による学習や交流の源流の一つであるイエナ・プランに着目し、2008年度にドイツ現地にてイエナ・プラン校の予備調査を実施した。その結果、異年齢集団の構成法には、2学年混合、3学年混合、そして4学年混合が見られ、ばらつきが見られることが判明した。イエナ・プラン校では、このように異年齢集団の構成法に関して違いが存在している。なぜこのような違いが生じるのか、また、それぞれの構成法の教育的特質はどのようなものか。本研究は、これまで未解決のこうした問題に着手するものである。

## 2. 研究の目的

本研究では、異年齢集団の思想的源流の一つであるイエナ・プランにおける異年齢集団の構成法の思想と現状について調査し、異年

齢集団の各構成法の特質を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究における研究の視点及び研究方法の手順は次の4点である。

- (1) イエナ・プランにおける異年齢集団の問題を、その創始者であるペーターゼンの思想形成過程へとさかのぼって考察し、ペーターゼン自身による異年齢集団の構成法の原理的考察を試みる。
- (2) 「ドイツ・イエナプラン教育学会」が認定しているドイツ国内のイエナ・プラン校の現地調査を行い、異年齢集団の構成法を実地に把握する。
- (3) 前述の調査結果に基づいて、ドイツのイエナ・プラン校における異年齢集団の構成法を分類・整理し、さらに各構成法の教育的意義について考察する。
- (4) 前述の考察結果に基づいて、日本における異年齢集団の構成法へ応用するうえで示唆と今後の展望を示す。

## 4. 研究成果

### (1) ペーターゼンによる異年齢集団の構成法

異年齢集団をいかに構成し実践していくかという問題は、現代のイエナ・プラン校のみならず、既に創始者ペーターゼン自身にとっても、決して簡単な問題ではなかった。彼は1942年に記した未発表原稿「経歴」の中で、1924年4月からイエナ大学附属学校において常に試行錯誤を繰り返してきたことを明記している。その試行錯誤の軌跡は、主著『自由で一般的な国民学校のイエナ・プラン』の中にも確認することができる(以下本書を『イエナ・プラン』と略記)。本書の初版(1927年)において、彼は「どの年齢と一緒にするのが一番良いか、そしてそもそも年齢幅はどのぐらいにするのが良いのかということについて、もちろん何も決定的なことが言えない」(引用文献、21頁)としていた。そして、当時の国民学校(Volksschule)の制度を念頭におきつつ試行錯誤を続け、第3版(1932年)において、最終的に3学年混合による異年齢集団の構成法を採用することになった。

しかしここで強調しておきたいのは、「イエナ・プランは3学年混合」を決定的なこととして捉えることは、ペーターゼンの真意を必ずしも正しく捉えてはいないという点である。ペーターゼン自身は、イエナ・プランを「ドグマではなく、一つの出発形式」に過ぎないと考えていたし、前述のように彼は常に試行錯誤を続け、当時の子供の発達の状況を踏まえて3学年混合による異年齢集団の構成法を採用したのであって、3学年混合が先行していたわけでないことは注意すべき点である。また、3学年混合を「『親方・職人・弟子』という三者関係」に見たてる記述も、

『イエナ・プラン』の第5・6版(1934年)において、「徒弟、職人、親方のように」(引用文献、57頁)と表記されるまでは見られなかったもので、このことも、最初から彼が3学年混合を前提にしていたわけではないことを証している。

## (2) 現代ドイツのイエナ・プラン校における異年齢集団の構成法

現代ドイツのイエナ・プラン校における異年齢集団の構成法は、実際にどのようなものになっているのか。この点を解明するために、平成25年度から27年度にかけてドイツのイエナ・プラン校(基礎学校または基礎学校段階を含む一貫校)を訪問し現地調査をおこなった。現地調査にあたっては、次の3条件を満たすイエナ・プラン校を訪問の対象とした。

条件1:「ドイツ・イエナプラン教育学会」がイエナ・プラン校として認定している学校であること。

条件2:研究代表者が現地調査を行うことが可能な時期(8月~9月及び2月~3月)に既に通常の夏学期中、あるいは冬学期中となっている学校であること。

条件3:現地調査の訪問について事前に受け入れの承諾を得ることができた学校であること。

以上述べた3条件を充足した19校のイエナ・プラン校(基礎学校または基礎学校段階を含む一貫校)について現地調査を行った(表参照)。

(表)調査対象となったイエナ・プラン校一覧(平成25~27年度)

所在地(州)	イエナ・プラン校	A	B
バイエルン	Jenaplan-Schule Nürnberg	4	4
	Jenaplan-Schule Würzburg gemeinnützige GmbH	一貫	3
ベルリン	Jenaplan-Schule Berlin-Neukölln	6	3
ブランデンブルク	Jenaplanhaus Lübbenau	6	3
	Jenaplan-orientierte Laborschule Dresden	6	3
ヘッセ	Jenaplan-Schule Hungen	4	3
メクレンブルク= フォアポメルン	Jenaplan-Schule Rostock	一貫	3
ノルトライン=ヴェ ストファーレン	Lindenbornschule	4	2
	Peter-Petersen-Grundschule Grenge	4	2
	GGG Katterbach	4	2
	Rosenmaarschule	4	4
	GGG Balthasarstrasse	4	2
ザクセン	GGG Mülheimer Freiheit	4	2
ザクセン	Jenaplan-Schule Makersbach	一貫	3
シュレースヴィヒ =ホルシュタイン	Grundschule Großenwiehe	4	2
テューリンゲン	Jenaplan-Schule Jena	一貫	3
	Jenaplan-Schule Suhl	一貫	3
	Staatliche Gemeinschaftsschule Weimar	一貫	3
	Evangelische Grundschule Gotha	4	2

\*A=基礎学校の特徴(4年制は「4」、6年制は「6」、初等・中等一貫校は「一貫」と表記)

\*B=異年齢集団の構成法(2学年混合は「2」、3学年混合は「3」、4学年混合は「4」と表記)

これら19校の現地調査から次の8点が明らかになった。

かになった。

この表に見られるように、ドイツのイエナ・プラン校における異年齢集団の構成法は、2学年混合、3学年混合、4学年混合に大別されている。

6年制の基礎学校では、3学年混合の異年齢集団が構成されている。

初等・中等教育の一貫校では、と同様に3学年混合の異年齢集団が構成されている。4年制の基礎学校10校のうち、7校において2学年混合の異年齢集団が構成されている。

4年制の基礎学校10校のうち、3学年混合の異年齢集団が構成されているのは、わずか1校のみである。

4年制の基礎学校10校のうち、2校において4学年混合の異年齢集団が構成されている。

6年制の基礎学校では、2学年混合と4学年混合の異年齢集団は構成されていない。初等・中等教育の一貫校では、2学年混合と4学年混合の異年齢集団は構成されていない。

## (3) 異年齢集団の構成法の分類・整理と教育学的意義の考察

前述の調査結果から、現代ドイツのイエナ・プラン校における異年齢集団の構成法は、2学年混合、3学年混合、4学年混合に分類されることが確認された(この場合の異年齢集団は、基本的に年間を通じて同じ教室空間において異年齢の子どもと一緒に学校生活をおくる。この点、我が国における一般的な異年齢交流との違いがみられる)。

さらに調査結果から、これら3つの構成法の取り扱いには次のような差異の見られることが明らかになった。

3学年混合の構成法:6年制のイエナ・プラン校(基礎学校または基礎学校段階を含む一貫校)においては、ペーターゼンが最終的に採用した3学年混合の構成法が選択されている。

4学年混合の構成法:4年制のイエナ・プラン校(基礎学校)においては、ペーターゼンが最終的に採用した3学年混合の構成法は回避され、4学年混合の構成法が理想とされている。

2学年混合の構成法:4年制のイエナ・プラン校(基礎学校)において4学年混合が困難と判断される場合、2学年混合が選択されている。

これら3点について説明し、それぞれの教育学的意義について考察する。まず、ドイツの基礎学校は、日本における小学校に相当する。ドイツは16州からなり、そのうちベルリン州とブランデンブルク州の基礎学校は6年制であるが、それ以外の州では4年制が原則と

なっている。で示した3学年混合の構成法はペーターゼンが最終的に採用したものであるが、基礎学校が6年制ないし初等・中等一貫校の場合は3学年混合の構成法がスタンダードになっていた。換言すれば、2学年混合と4学年混合は、4年制の基礎学校という制度への対応策として生じているのである。

4年制の基礎学校では、に示された3学年混合の構成法が教育学的な理由で回避され、に示されたように4学年混合の構成法が理想とされている。現行の基礎学校において3学年混合を取り入れるということは、通常、1~3学年目までは異年齢集団による学校生活となるが、4学年目は単学年で過ごすことを意味している。これでは4年間一貫した異年齢集団の学校生活を導入することは困難になる。4学年目を単学年化する理由としては、次の学校段階への移行準備が挙げられている。4年制の基礎学校を終えて、次のギムナジウム、実科学校、そして基幹学校への移行準備がその目的となる。換言すれば、進学準備のために異年齢集団による学校生活を犠牲にするわけである。それゆえ、に示されたように、現行の4年制下においては4学年混合が理想となる。

ただし今回の調査によって、4年制の基礎学校であるにもかかわらず、4学年目を単学年にすることなく3学年混合の構成法を導入しているイエナ・プラン校が存在することも確認できた。ヘッセン州にあるフンゲン校（Jenaplan-Schule Hungen）は4年制の基礎学校であるが、基礎学校入学前の就学前段階をも含み込んで、「就学前・1学年・2学年」と「2学年・3学年・4学年」の2段階構成によって3（学）年混合の異年齢集団を実現していた。

4学年混合についてペーターゼン自身は、『イエナ・プラン』の第2版（1929年）において、「綿密な観察」の結果、4学年目を1~3学年から離すべきであると主張していた（引用文献、24頁）。さらに第3版（1932年）では、基礎学校を痛烈に批判し、4学年混合を拒否している。基礎学校は1920年4月28日に制定された「国家基礎学校法」によって導入されることになった。しかしペーターゼンは、この基礎学校を「純粋に教育政策的で、まったく教育的でない、いわゆる『基礎学校』（引用文献、41頁）と批判し、4学年混合はそうした基礎学校に「いけにえ」（同上）をささげる行為に等しいと批判していた。

とはいえ、ペーターゼン自身が1920~30年代当時の時代状況の中で、絶えず「綿密な観察」を行って異年齢集団の構成法について結論を導き出していたように、現在における子どもの精神的・身体的発達状況、そして久しく定着してきた4年制の基礎学校制度を踏まえての取り組みが不可欠であろう。その意味で、4学年混合を理想とする主張も現在のドイツにおいては妥当性を有している

と考えることができる。

この4学年混合の構成法を実現している4年制のイエナ・プラン校がノルトライン＝ヴェストファーレン州にあるローゼンマール校（Rosenmaarschule）である。この学校は戦後いち早く旧西ドイツでイエナ・プランを復活させた学校として知られている。4年制の基礎学校であるが、困難とされる4学年混合の異年齢集団による学校生活を日常化している。その優れた点は、教員一人一人を孤立させない「コミュニケーションと協同」を鍵概念とするチーム編成による学級経営の実践にある。現地調査を行った学校の中では最良の方法論を確立している学校の一つであると評価できる。

の2学年混合の構成法について、ペーターゼンは『イエナ・プラン』第5・6版（1934年）において、集団の力学から見て、2学年混合では毎年、集団の構成メンバーの半分が変わるため、これまでその集団が有していた良い習慣が損なわれる危険性を指摘していた。しかし、3学年混合と4学年目の単学年化というあり方と比較すれば、2学年ずつではあっても基礎学校時代を異年齢集団で一貫して過ごすことができる点は現在では利点となる。

ところで、何故に4年制の基礎学校において理想とされる4学年混合が実現できず、に示したように、圧倒的に2学年混合の構成法が採用されているのか。この背景には異年齢集団による学習と交流を担うことのできる教員の力量形成の問題が潜んでいる。その対策として、「ドイツ・イエナプラン教育学会」の理事会決議で研修と資格付与に関する大綱協定が示された（2010年11月6日付）。また、ブランデンブルク州にあるリュッペナウ校（Jenaplanhaus Lübbenau）では在職教員を対象に「イエナプラン・ディプロムコース」が実施されている（2010年~2013年）。前述の大綱協定に基づいて「イエナプラン・ディプロムコース」が開講される場合、「ドイツ・イエナプラン教育学会」の専門誌（KINDERLEBEN）やホームページ上に掲示されることになるが、こうしたコースの定期的な開講は見られず、ドイツにおけるイエナ・プランの研修と資格付与の恒常的な制度化は、現時点では課題のままとなっている。

（4）異年齢集団の内的性質：日本における異年齢集団の構成法へ応用する際の示唆

これまで述べてきたように、異年齢集団の構成法には2学年混合、3学年混合、4学年混合があり、その選択は4年制か6年制かといった制度の問題や教員の力量形成の問題と関連していることが明らかになってきた。しかし、異年齢集団の構成法には2学年混合、3学年混合、4学年混合が存在するという事実から、これらいずれの異年齢集団をも同じ「イエナ・プラン」における異年齢集団として評価しうる指標は、どこに求めることがで

きるのかという問題が生じる。

この問題について、前述のリュッベナウ校における「イエナプラン・ディプロムコース」（2010年～2013年）の研修内容に関する調査から、重要な知見を引き出すことができた。この教員研修において異年齢集団に関して取り組まれていたことは、異年齢集団における学習や交流の技術論ではなく、異年齢集団の内的性質に関する理解を深めることであった。2学年混合、3学年混合、4学年混合のいずれの異年齢集団においても、そこに共通して求められていたのは、ペーターゼンが『授業の指導論』（1937年）で示した「共同体」（Gemeinschaft）としての内的性質であった。

ペーターゼンは「共同体」の成立要件を、人間同士が「お互いを必要とし、お互いの言葉に耳を傾け、直接お互いに独自の関わり合いを有する」（引用文献、80頁）ことに求めている。このような人間的な関わりが尊重される集団を、彼は「共同体」としてとらえていたのである。それに対して、集団の外から決まりやルールが強制的に押し付けられる場合、結果的には「最良のもの死」が、「共同体そのものの、まさに死」（引用文献、76頁）が待っているとしている。そして、「共同体」の死は、その集団の構成員の「プライベートな領域への逃亡」（同上）へ通じるといふ。つまり、「共同体」としての異年齢集団に生命性を与えるものは、構成員相互の人間的な関わりであり、その集団を死へ追いやるものは、外から与えられる決まりやルールの強制的な押し付けである。前述のような意味での「共同体」が崩壊すれば、構成員は相互の人間的関係から離れて、利己的な世界へと逃亡する。

2学年混合であれ、3学年混合であれ、4学年混合であれ、異年齢集団の構成においては、その集団が「共同体」としての内的性質を満たしうるか否かが鍵を握っていると考えられているのである。このことは、我が国における異年齢集団による学習や交流の取り組みに対しても、その「共同体」としての内的性質への着目を促す点で示唆に富むものであると言える。

#### （5）今後の展望

研究代表者はこれまでの研究を通じて、イエナ・プラン校における2学年混合、3学年混合、4学年混合の異年齢集団について調査し、異年齢集団に共通して求められている「共同体」としての内的性質の重要性を指摘するに至った。しかし、これまでの研究においては、この内的性質の有無の指標を構造化するまでには至らなかった。「ドイツ・イエナプラン教育学会」及びその傘下で行われた「イエナプラン・ディプロムコース」においても、その指標は構造化されていないため、異年齢集団の質保証への取り組みは進展していない。この問題を解決するため、研究代

表者は、今後、イエナ・プランの原点に立ち返り、ペーターゼンによるイエナ大学附属学校での異年齢集団の実際について調査し、そこから「共同体」としての異年齢集団を規定する指標の明確化と構造化に取り組んでいく予定である。

#### <引用文献>

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*. Beltz 1927.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*. Zweite erweiterte Auflage, Beltz 1929.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*. Dritte neu durchgesehene und vielfach erweiterte Auflage, Beltz 1932.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*. 5./6. neu durchgesehene und erweiterte Auflage, Beltz 1934.

Peter Petersen, *Führungslehre des Unterrichts*, Beltz 1937.

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

佐久間裕之、イエナ・プランにおける異年齢集団と教員研修：GJPの「ディプロムコース」を事例として、玉川大学教師教育リサーチセンター年報、査読有、No.5、2015、pp.19-29

佐久間裕之、ペーターゼンのペスタロッチー理解：「人間学校」（Menschenschule）の理念を軸に、人間教育の探究：日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要、査読有、No.27、2015、pp.27-51

佐久間裕之、イエナ・プランにおける異年齢集団と教師の力量形成：ドイツ・ローゼンマール校を事例として、玉川大学教師教育リサーチセンター年報、査読有、No.4、2014、pp.57-66

〔学会発表〕（計 2 件）

佐久間裕之、イエナ・プランにおける異年齢集団の構成法に関する研究：ドイツ・ローゼンマール校を取り上げて、世界新教育学会、2014年6月8日、関西大学（大阪府・吹田市）

佐久間裕之、ペーターゼンとペスタロッチーを繋ぐもの：「人間学校」（Menschenschule）の理念を軸に、日本ペスタロッチー・フレーベル学会第31回大会、2013年9月15日、北星学園大学（北海道・札幌市）

〔図書〕(計 1 件)

佐久間裕之、みすず印刷所、平成 25～27  
年度日本学術振興会科学研究費補助金基  
盤研究(C)(課題番号 25381044)「イエナ・  
プランにおける異年齢集団の構成法に関  
する研究」研究成果報告書：イエナ・プ  
ラン研究序説 ドイツにおける異年齢集団  
の問題を中心として、2016、116

〔産業財産権〕該当せず

〔その他〕なし

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

佐久間 裕之 (SAKUMA, Hiroyuki)  
玉川大学・教育学部・教授  
研究者番号：70235208